

アリゾナ大学

海外臨床薬学研修報告書

100973402

浅井 美穂

私は、大学に入学して、海外臨床研修というプロジェクトがあることを知りました。そして講義や海外臨床研修報告会を通して、日本や海外の薬剤師の役割や業務について学ぶうちに、アメリカでは日本よりも薬剤師の職能が幅広く認められているとすることを学びました。そして、5年になり、実習、特に病院実習を通して、監査や服薬指導だけではなく薬剤師が医師や看護師と共に医療チームの中で働き、薬剤師の考えが治療に反映される様子を見ました。その姿を見ているうちに、薬剤師の権利が幅広く認められているアメリカでは薬剤師がどのように働いているのか、薬剤師として働くために薬学生は何をどのように学んでいるのかを知り、日本とアメリカを比較し、アメリカの良い部分を取り入れていけたらと思い、臨床薬学研修に応募しました。

そして、平成27年2月21日から3月8日までアリゾナ大学にて、海外臨床薬学研修を行いました。大学の先生方によるマンツーマン講義、授業への参加、病院見学、薬局見学、薬学生との交流を行いました。

研修では、まず、アメリカにおける薬剤師の教育制度を学びました。日本では、6年間薬学教育を受けます。その後、薬剤師として働くようになります。割合は低いですが、薬剤師の研修生のようなものであるレジデントとして働く人もいます。また、名城大学では早期体験実習として、病院、薬局での実習が1年次にそれぞれ1日行われ、本格的な実習は5年次から病院、薬局、それぞれ11週間ずつ行われます。アメリカでは、まず2年もしくは4年間プレファーマシースクールに通い基礎を学んだ上で、4年間のファーマシースクールに通います。その後、必須ではありませんがほとんどの人が薬剤師の研修生のようなものであるレジデントとして研修を受け薬剤師として働くようになります。臨床実習については、2年次(日本では4年次)に120時間、3年次(日本では5年次)に120時間の実習を行います。また、常駐教員の半分は現在も臨床現場で働いている薬剤師であり、最新の現場の知識をもった薬剤師から教育を受けることができます。日本とアメリカの教育制度を比較して、アメリカでは長時間の臨床実習が早期から取り入れられ、6年間全体を通して、臨床経験を積む時間が圧倒的に多いことが印象に残っています。臨床経験を積むことで、臨床現場に応用できる知識を身につけることができるだけでなく、医師や看護師、他職種とのコミュニケーション力、患者とのコミュニケーション力を身につけることができると感じました。この点が魅力的であり、薬学教育において重要であると私は感じました。名城大学にはアドバンストコースがあり、通常の2.5ヶ月よりも長い期間(全10か月)実習を行うコースがありますが、このコースを選択するのはほんの一部の学生だけなので、なるべくより多くの学生がこの制度の下、長期間の実習を行うことができたら良いと感じました。また、臨床現場で薬剤師として働いている先生方から、その時々現場の知識をもって指導してもらえる点も魅力的だと感じました。

次に、アメリカのレジデントに付き、病棟の見学をさせて頂きました。私は、ICU病棟にて医師、薬剤師、看護師のチームカンファレンスを見学しました。カンファレンスでは、医療チームの中でレジデントが投与量や投与経路の変更、薬剤の変更を積極的に提案したり、

医師から投与量の決定を任されたり、レジデントの意見が治療に反映される様子を目の当たりにしました。私は、まず、レジデントであるにも関わらず、他職種から深く信頼されている様子に衝撃を受けました。また、医師から薬剤の投与量の決定を任せられるなど他職種からの信頼度が高いこと、薬剤師が積極的に意見を提案する姿が印象に残りました。積極的に自分の意見を述べる姿勢や、自信をもって意見を述べられるような知識を身につけるべく学習する様子を見習っていきたいと思いました。

次に、地域薬局を見学させて頂き、薬剤師の先生からお話を伺いました。日本の薬局とアメリカの薬局で異なる部分は、トランスファー処方箋、リフィル処方箋、口頭処方せん、薬剤師によるワクチン接種、テクニシャンによる調剤が認められていることです。トランスファー処方箋は、薬局から薬局へ送ることのできる処方箋のことであり、患者の希望する薬局で薬を受け取ることができます。リフィル処方せんは、一定の期間内で反復使用できる処方箋のことで、アメリカでは、リフィル処方箋がよく使われています。口頭処方箋は、医師からの電話により、口頭で受け付ける処方箋のことで、また、アメリカでは、対象年齢や、薬剤の一部規制はありますが、薬剤師がワクチン接種を行います。そして、アメリカでは、テクニシャン制度があります。調剤はテクニシャンに任せることで、薬剤師は監査に集中することができます。リフィル処方箋や薬局でのワクチン接種はセルフメディケーションが重要視されているアメリカならではの制度だと感じました。医療費が増加している日本において、リフィル処方箋の導入は医療費の削減につながると考えます。また、地域薬局にて、OTC 薬品の見学を行いました。アメリカの薬局には、日本では一般販売が許可されていないPPIなどの薬剤や経口避妊薬が売られていたり、サプリメントの種類が日本と比べて圧倒的に多かったりと、数々の違いを発見し、驚きました。

次に、アメリカの薬学生と共に、講義を受けました。私は、病態を理解するための授業に参加しました。名城大学でも、薬物治療学で同じような授業を受けるので、この点は同じだと感じました。そして、薬についての授業にも参加しました。この授業では、ガイドラインをもとに、どの薬剤を選ぶべきなのか、具体的な薬剤名が示されていました。また、1回〇〇gを1日〇〇回、〇〇日間経口投与のように、詳しい用法用量が示されており、臨床現場で症例に直面したとき実際に現場で知識を使えるような授業が行われていると感じました。授業で、薬の選び方、使い方を学び、長い期間をあけることなく実習で知識を使うことができる点が魅力的だと感じました。

また、症例検討の授業を見学しました。この授業では、薬学生が10人ほどのグループを作り、事前に各自が考えてきた症例の問題点や今後のプランなどについて話し合います。1グループにつき、教授かレジデントが1人付き、話し合いが間違った方向に進まないように見守ります。ここでも印象に残ったのが、薬学生の積極性です。間違いや意見が対立することを恐れない姿勢に驚きました。また、まず個人が考え、その上でみんなで話し合うという流れにそって行われるため、薬学生一人一人が思考力を伸ばすことができると感じました。

私は、海外研修を通して、薬剤師が病態を学ぶこと、薬の選び方、使い方を学ぶこと、そして、症例をまず自分の力で検討し、文献や情報などエビデンスに基づいた意見を積極的に示すことの大切さを学びました。また、多職種が連携しているチーム医療においては、コミュニケーション力が必要であることを学びました。そして、やはり、経験を積むことが必要不可欠であると強く感じ、アドバンストコースは薬学生として成長するためにとっても良い場であると再認識しました。今後は、アメリカの薬学生を見習って、常に学ぶ姿勢を忘れず、自分に何ができるか考えながら実習に取り組んでいきたいと思えます。